故・福田昌子先生の銅像が
いまも静かに学園を見つめ続けています。

史上最年少の二十六歳の若さで
医学博士の学位を取得。
戦後、五期にわたって福岡を代表する
女性国会議員として活躍し、
自らの草案で議員立法として
優生保護法を法案化。
そして、福岡でもっとも古い
純真女子短期大学の創設。
数々の偉大な功績が讃えられ、
昭和五十一年、正四位勲二等瑞宝章が
授けられました。

東和大学の卒業式にて（昭和47年）

# 福田昌子先生 生誕百周年

## 特集 思い出を紡いで――

福田昌子先生の炯眼に感謝しながら／国文科一回生　別所一恵

福田昌子先生と修学旅行／国文科六回生　野田紫津

福田昌子先生の思い出／英文科九回生　村上千恵

福田昌子学長とわが青春の想い出／家政科三回生　有吉ユミコ

## 感謝を込めて

平成二十四年は、福田昌子先生のお誕生百年にあたります。先生は、戦後の女子教育や女性の社会的地位の向上等に尽力され、私たち純真女子短期大学の学生たちに大きな夢と希望と誇りを持たせてくださいました。この節目の年に、皆様とともに今一度、先生の遺徳を偲び、感謝の気持ちを届けたいと思います。

福田学園四十周年誌に、昌子先生を偲ぶ故・福田敏南前理事長の言葉が残されていますのでご紹介します。

「私にとって福田昌子は、姉であると同時に人生の師匠でもありました。姉は生涯を通じて人の二十倍も四十倍も働き通した感じです。医師としても、国会議員としても、私学経営者としても、通常の男性でもそのうち一つをこなすことも難しい問題を克服し、また、それぞれに業績を残し、ようやく人生の完成期に到達しかけたときに突如としてこの世を去ってしまいました・・・」

さらに、昌子先生が今しばらく存命であったならば、学園はもっと強大な基盤を築くことができたであろうと言葉を結んでいました。

福田昌子先生
生誕百周年

左手に雑木林の小高い丘、
運動場を挟んでドロンコの急な坂道。
その奥に西部劇に出てくるような
二階建ての木造作りの教室。

# 福田昌子先生の炯眼に感謝しながら

坂道を登って行く垢抜けた乙女達。
地方出身の紺のスーツの女の子。
たぶん彼女達は夢と希望は半々で、
その坂を登って行く・・・。

国文科一回生　別所一恵

福田昌子先生とどこで初めてお会いしたのか、定かではありません。

当時、国会議員として活躍中で、福岡県一区から五期連続当選し、議員立法として「優生保護法」を成立させるという快挙を成し遂げられました。また、戦後立ち遅れていた女子教育の必要性を感じ、自らの体験を生かした教育の場づくりを目指されたのです。私はそのことを知ったとき、大変興味がありました。でも私自身、在学中にはそんなに先生とは身近ではなかったように記憶しています。

昌子先生は、私達に理想の教育を実践するため、教授、講師陣に本当に贅沢という言葉がふさわしい人選をされました。先生の熱意と人望に惹かれ、開学直後の苦しい台所を察し、薄給ながら奉職してくださっていました。

当時の純真女子短大は、九州大学文学部の分校のようでした。図書館も使わせてもらいました。有名な教授たちにも来ていただいていました。でも、何も知らない私達は、ずいぶん失礼なことを申し上げ、遠足に誘ったり、学校帰りに野間四つ角で九州大学教授の東洋史の日野先生にお茶をねだったりしていました。先生は笑いながら「オイオイ君たち、僕が一コマいくらで来てるか、知ってるかい？」等と言っていましたが、よく帰り道をご一緒しました。教え子に芥川賞作家がいる等、授業の余談も楽しみでした。

万葉集の春日和男先生の朗々たる声に聞きほれ、日本史の桧垣先生、言語学の吉野先生、源氏物語、近松等は西南学院大学の清田先生（私の学校の先輩です）、道行き場面の振り等は今でもはっきり覚えています。あの頃は、「朝から晩まで学校に居た」ような気がしますが、そのはずです。二年間で一二四単位も取得したのです。

福田昌子先生
生誕百周年

# 福田昌子先生と修学旅行

国文科六回生　野田紫津

私共六回生の修学旅行は、北海道と秋田の十和田湖・奥入瀬を三週間かけて廻るというものでした。学園紛争終結後、初ということで学長を交替した昌子先生も同行されました。

昭和新山を背景に記念写真。一番後ろの白い帽子が福田昌子先生

双湖台にて。左が福田昌子先生

札幌藻岩山にて。左が福田昌子先生

私共六回生が入学した年に学園紛争が起こりました。今考えてみると、創立者の昌子先生に対して反対運動をするなんて本当に生意気だったと思うのですが、当時はそれが正しいと信じて必死でした。弟君の故・敏南先生いわく「一緒に行ったのはこの時だけだから、よほど気にしていたんだろうなァ」とのこと。

ワクワクしながら七月十七日に出発。大阪で乗り換え、日本海沿いを夜行列車に揺られ、青函連絡船で海を渡るというのんびりしたものでした。記念すべき最初の朝は、九州と違ってサラリとして爽やかだったのに、学長との間には、何となくぎこちない空気が漂っていたのを覚えています。その日から函館を皮切りに洞爺湖、昭和新山、白老、釧路湿原、屈斜路湖、摩周湖、阿寒湖、網走、原生花園、層雲峡、定山渓、美幌、羊ヶ丘等を廻ったのですが、特に印象に残っているのは、真夏だというのに水の冷たさに驚いたオホーツクの海、残雪に歓声をあげながら登った大雪山、雪印乳業見学で食べたアイスクリームの美味しかったこと・・・等です。今、思い出すと現

国文科６回生の卒業時のスナップ。
中央が福田昌子先生

函館五稜郭にて。
右から5人目が福田昌子先生

摩周湖にて。左が福田昌子先生

在の海外旅行よりも興奮していたような気がします。

そんな中、一つ釜の飯を食べた仲と申しますが、一緒に旅をするうちに、昌子先生の歯に衣を着せない話し方や、気さくな人柄にすっかり魅せられ、今まであったわだかまりが、雪のように解けていきました。一番心に残っているのは、「学校は私の分身であり、学生は自分の子供のようなもの」という言葉です。生意気ばかり言っていた私でしたが、奥入瀬散策の頃には、この学長や学校の為に頑張りたいと思うようになっていました。

この旅を境に、卒業後もお付き合いをさせて頂くことになるのですが、ある時「花の咲く木が好き」という昌子先生の希望で、金木犀を寄贈いたしました。あれから半世紀、大きく育った金木犀は、毎年秋になると昌子先生の座像の横で、青春の日を想い出させるように、甘酸っぱい香りを漂わせています。

福田昌子先生
生誕百周年

# 福田昌子先生の思い出

福田昌子先生と謝恩会にて

英文科九回生　村上千恵

私が、短大を卒業して40数年が経ちました。時々母校に来させていただきますが、学校に来ますと、この間、短大生だったような気持ちになります。しかし年月は早いもので、此の間お別れしたように思っていました福田昌子先生ですが、生誕百年とお聞きしました。せっかくの機会ですので、昌子先生の思い出を振り返ってみました。

私が昌子先生に初めてお会いしたのは短大の受験の時でした。

女性の先駆者として数々のご活躍をされた方とお聞きしていましたが、着物を着られ、眼鏡をかけられたお姿はきりっとされ、とても緊張したことが思い出されます。

そして入学後、私達が入った寮は、にわか仕立ての古い校舎を改造したものであり設備が多々不足していました。しばらくは我慢をしていましたが、なかなか改善されなかったので寮生一同で、福田学長と話し合いを持ちました。どきどきしながらの話し合いでしたが、その後すぐ改善をしてくださいました。新入生の話にも耳を傾けてくださるやさしいお気持ちが伝わってきました。

また、短大卒業後も昌子先生のおかげで学校の事務局で働くことになったのです。ちょうど大学もでき、立派な校舎にも引っ越し、発展を始める時でしたが、早期に職場を去ることになったのです。しかし、短大で学んだおかげで故郷に帰ってからも青少年関係の仕事に就くことができたのです。また結婚後も他県で再び採用され定年を迎えることができました。これも純真のおかげと思っています。たくさんの友人を得、共に学び遊んだ短大生活を思い出す度に、昌子先生のお姿が脳裏に浮かびます。

今でもきちんと着物を着られ、眼鏡の奥からきらっと光った目、さっそうと歩かれる姿が印象に残っています。学園に建っています福田昌子先生の銅像を見ると当時が思い出されます。

謝恩会の時に、福田昌子先生と一緒に写った写真を眺め、久しぶりに懐かしく思い出しています。

昭和40年頃の空撮。
グランドに「F.G」の文字

国文科１回生。
キャンパスでのスナップ

昌子先生のおかげでいろいろなことに興味が持てました。音楽も手芸も、ダンスも料理も、先生が常々おっしゃっていた女性が女性らしくあるためのさまざまなたしなみを教習しました。好奇心旺盛で多感な女子学生にとって、純真女子短期大学は、自由な空気に包まれ夢のような空間でした。

また、若い先生方が専任で入られました。中国文学の上尾先生、李賀の話をよくしてくださいました。詩人野田寿子さんと新婚でした。よくいろんなことを話してくださいました。シベリアのことも・・・。

仏語の常岡先生、ジョークかな？と思いつつ聞いていました。テキストのことで失礼なことをしたことが思い出されます。

佐田先生、独身でまじめでした。事務局の梅木先生、ハーフのような風貌で女子学生のあこがれでした。後に福岡県立女子短大の学長になられました。私はその下で、働かない事務職員をしていましたが、人生についていろいろ教えていただいたような気がします。

美学の塩塚先生、司書の奥野先生、もちろんその後できた家政科に西沢教授、助手の久保寺さん、すばらしい人生の師を送り込んでくださった福田昌子先生の炯眼に感謝します。

諸先生方の学問的な意欲、人間性、思考力、生き方と有難い無形の指導を受けたことで、今も教育の大切さを痛感致しています。人と人とのめぐりあわせは、本当に大切ですね。

国文科１回生が中心の文化祭でのスナップ。懐かしい先生方の顔も・・・

※写真はすべて「福田学園四十周年誌」より

福田昌子先生
生誕百周年

# 福田昌子学長とわが青春の想い出

家政科三回生　有吉エミコ

家政科３回生クラス会。平成19年６月３日　大丸別荘にて

昭和三十四年四月、それは、私が福岡の純真女子短期大学家政科に入学いたしました年でございます。その当時、博多の街で福田昌子学長の名前を知らない人はいないくらい有名な女性の方でした。何しろ戦後アメリカの民主主義の時代到来と云えども、まだまだ女性代議士は少数派でしたし、その当時、最もキラキラと輝いている一人の女性とでも申しましょうか？

短大に入学しまして初めてお顔を拝見し、また、お話を聞きました時、直方市の片田舎から入学して参りました私達とは、何だか次元の違う方のように思えてしまいました。服装は紫系の色が良くお似合いで、口調はハキハキしていらっしゃって、本当に素晴らしい方でした。当時は雲上の存在と云う処でしょうか。

短大時代は大濠に寮があり、近くにはアメリカ領事館がありました。朝、通学していた時、ペギー葉山さんの「南国土佐を後にして」や、洋楽では「ベッサメムーチョ」の曲をよく耳にした覚えがあります。また、野球では、西鉄ライオンズが全盛で、「神様、仏様、稲尾様」と云われていた時代でもありました。

私達、我儘娘三人で大濠の寮を早々に飛び出し、若久の下宿に移りました。当時、食パンの間に魚の缶詰を挟んで特製サンドイッチを作り、それを良く食べまして、あの純真の坂を上り下りしたものでございます。

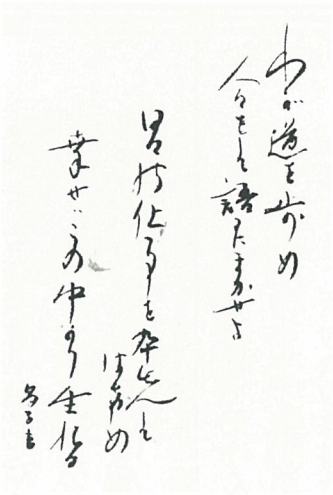
今は昔に比べてすっかり学校の風景も変化してしまいましたが、当時はまだ学園の建造物も少なくて、坂を上りきった上の方を純真山と呼んでいました。授業が終わると、一目散に天神を目指して出かけたものです。

こうして考えてみますと、短大を卒業してすでに半世紀以上経過しているのです。この間、私の人生も山あり谷ありでしたが、何処かで学生時代の想い出等が心の支えになっていたように思えるのです。今になってみますと、あの時、純真への進学を勧めてくれた父親（すでに父は他界しています）には、感謝、感謝の気持ちで一杯でございます。

大丸別荘庭園にて

# 福田昌子先生 生誕百周年

## 故・福田昌子先生の歩んだ道



昭和50年12月30日逝去　享年63歳
（昭和47年頃の撮影）

◎明治45年7月8日生。現福岡中央高校卒業後東京女子医科大学に入学◎昭和9年同校卒業、直ちに九大医学部産婦人科並びに病理研究室に入る◎昭和15年満26歳のときヒスタミンの研究により医学博士の学位を授与される。この博士論文は、当時ドイツの医学雑誌に掲載されたほど評価の高いものであった。その頃より福岡済生会病院において医療に従い、後大阪の至誠会病院の設立に参画し、爾来大阪において医療に専心する。戦争末期、厚生省に招聘され一時、戦中戦後の医療行政に携わることになった。

◆

◎昭和22年、夫人の衆議院候補者を探していた社会党から当時の三好弥六福岡市長に相談があったが、三好市長が福田昌子先生の厳父と親交のあったところから、市長じきじき東京に出向いて出馬を促した。立候補を決意したのは投票の18日前であった。爾来連続五期衆議院議員に当選。その間、優生保護法を自ら立案し、議員立法として成立させ、母性保護のため日本の医学史、社会史に残る画期的成果をあげる◎社会党中央執行委員、衆議院図書館運営委員会などを歴任し、国政の場においても大きな足跡を残した。

◆

◎昭和30年福岡に福田学園を設立し教育の場に挺身◎純真女子高校、純真女子短期大学等を逐次創立◎昭和42年、東和大学の創立をもって幼稚園から大学に至る一貫総合学園を完成した。また家族計画協会、婦人児童問題研究所等々の役員を兼ね、社会福祉のために尽瘁する。

◆

◎昭和48年夏頃より健康を害し、昭和49年1月九大附属病院に入院、加療に専念するも終に昭和50年12月30日、不帰の客となる。享年63歳であった。

◆

◎昭和51年1月13日、閣議で叙勲決定（叙勲　正四位、勲二等瑞宝章）

### 故・福田昌子先生　年表

| | |
|---|---|
| 明治45年7月8日 | 福岡県築上郡吉富町に生まれる |
| 昭和9年 | 東京女子医専卒（現東京女子医科大学） |
| 昭和15年7月 | 医学博士学位授与（九大）26歳 |
| 昭和22年4月 | 衆議院議員（この間優生保護法を議員立法で制定） |
| 昭和32年3月 | |
| 昭和30年10月 | 学校法人福田学園設立　理事就任 |
| 昭和31年4月 | 純真女子高等学校創設　校長就任 |
| 昭和32年4月 | 純真女子短期大学創設　学長就任 |
| 昭和39年4月 | 学校法人福田学園理事長に就任 |
| 昭和41年4月 | 純真女子短期大学附属じゅんしん幼稚園創設　園長就任 |
| 昭和41年4月 | 福田学園中学校創設　校長就任 |
| 昭和42年4月 | 東和大学創設　学長就任 |
| 昭和43年4月 | 純真女子高等学校並びに福田学園中学校を東和大学附属東和高等学校、東和大学附属中学校にそれぞれ校名変更、現在に至る。 |
| 昭和51年1月 | 昭和51年1月13日、閣議で叙勲決定（叙勲　正四位、勲二等瑞宝章） |

（学園葬の資料より）